

《履修上の留意事項》・全8回の講義を12グループに分け、担当6名の教員が同時開講する（各1名1グループ担当）
・各講義は1回につき2コマ開講され、1コマにつき6グループずつローテーション方式で進行する。

《担当者名》○下村敦司 shimo@hoku-iryo-u.ac.jp 太田亨 榊原健一 福田真二 鈴木瑞恵 若松千裕

【概要】

国家試験の出題基準表やモデルコアカリキュラムの到達目標をてがかりに、これまでに学んだ専門基礎科目の知識を整理・統合し、さらに専門基礎知識の獲得・定着を図る。これにより、臨床実習で学ぶ活きた言語聴覚療法を効果的かつ円滑に習得できるよう備える。講義では、学生が専門基礎科目に関わる問題を作成し、問題作成を通して専門基礎知識の整理・統合さらに獲得・定着を図る。作成した問題はデータベース化し、コンピュータ・ベース・ラーニング（CBL）により学生が主体的に復習できるようにする。

【学修目標】

<一般目標>

臨床実習において、医療現場での思考法や技能を効果的かつ円滑に習得するために、言語聴覚療法に関する問題作成を通して、言語聴覚療法の専門基礎知識を科学的に理解し身につける。

<行動目標>

1. 問題作成の際、言語聴覚士養成教育モデル・コア・カリキュラムを使用できる。
2. 問題形式を分類できる。
3. 問題作成のプロセス、さらに一般的留意事項を理解できる。
4. 各疾患・障害の病態生理を科学的に説明できる。
5. 各疾患・障害に対する言語聴覚療法の意義、目的、方法を科学的に説明できる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	オリエンテーション	・この授業の目的、さらに今後の予定について知る。 ・言語聴覚士養成教育モデル・コア・カリキュラムを学ぶ。 ・問題形式、問題作成のプロセス、さらに一般的留意点を学ぶ。	全担当教員
2 5 8	言語聴覚療法に関わる問題作成	・各疾患・障害の病態生理について知識および考え方を整理し、確認する。 ・各疾患・障害の病態生理についての問題を作成する。 ・各疾患・障害に対する言語聴覚療法 専門基礎について知識および考え方を整理し、確認する。 ・作成した問題を実際に解き、不適切な点の改訂を行う。 ・作成した問題はデータベース化する。	全担当教員

【授業実施形態】

面接授業

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【アクティブ・ラーニング】

導入している

【評価方法】

課題（問題作成・演習） 20%、定期試験 80%

【教科書】

広瀬肇 監 「言語聴覚士テキスト 第4版」 医歯薬出版 2025年
各領域の講義で紹介された教科書および配付資料

【参考書】

言語聴覚士国家試験対策委員会 編 「2026年版 言語聴覚士国家試験 過去問題3年間の解答と解説」 大揚社 2025年（出版予定）

その他、各領域の専門の教員が適宜、紹介する。

【備考】

1. 講義は変則日程で開講される。
2. 開講日時は掲示等で発表される。常に掲示を確認して、開講日時の変更に留意すること。
3. 授業に関わる連絡、授業資料の配信、学習課題の提示
 - ・ 授業に関わる連絡はmanaba、i-Portal、Google Classroomを利用する。
 - ・ 資料の配信はGoogle Classroomを利用する。
 - ・ 学習課題の提示はGoogle Classroomを利用する。
4. 問題のデータベース化に係る作業
 - ・ Google ClassroomとGoogle Formsを利用する。
5. 授業に関する意見交換
 - ・ Google Classroomを利用する。
6. 授業の理解度把握
 - ・ Google Classroomを利用する。

【学修の準備】

予習は、教科書、参考書あるいは授業で配布された資料を読んで理解に努めること（80分）。
復習は、データベース化した作成問題を解くことにより確認と理解に努めること（80分）。

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

（DP3）言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。

【実務経験】

太田亨（医師）

鈴木瑞恵、若松千裕（言語聴覚士）

【実務経験を活かした教育内容】

太田 亨：医療機関での医師としての臨床経験を活かし講義を行う。

鈴木瑞恵、若松千裕：医療機関での言語聴覚士としての臨床経験を活かし講義を行う。